

## 場の認知（ウチ・ソト・ヨソ）の違いによる自己表明のあり方の検討：青年期と中年期の比較から

高倉，那々実  
九州大学大学院人間環境学府

志方，亮介  
九州大学大学院人間環境学府

古賀，聡  
九州大学大学院人間環境学研究院

<https://doi.org/10.15017/2228902>

---

出版情報：九州大学心理学研究. 19, pp.43-50, 2018-03-22. Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University

バージョン：

権利関係：

# 場の認知(ウチ・ソト・ヨソ)の違いによる自己表明のあり方の検討 — 青年期と中年期の比較から —

高倉那々実 九州大学大学院人間環境学府  
志方 亮介 九州大学大学院人間環境学府  
古賀 聡 九州大学大学院人間環境学研究院

## A study of self-expression according to cognition of place (“Uchi,” “Soto,” and “Yoso”)

### — Comparison between young adulthood and middle age —

Nanami Takakura (*Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu University*)

Ryosuke Shikata (*Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu University*)

Satoshi Koga (*Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University*)

This research explored self-expression in young adulthood and middle-age, using the viewpoint of interpersonal relationships “Uchi,” “Soto,” and “Yoso.” Young adults and middle-aged people (N=270) completed a questionnaire. The results of factor analysis of the self-expression scale revealed three factors labeled as “expression of favorable intention,” “expression of intention based on belief,” “expression of feelings of difficulty.” Moreover, in young adulthood, a high degree of self-expression was associated with the “expression of favorable intention” factor (in the order of “Soto,” “Uchi,” and “Yoso”), and with the, “expression of intention based on belief” factor (in the order of “Uchi,” “Soto,” and “Yoso”), whereas the “expression of feelings of difficulty” factor showed the lowest extent of “Yoso” self-expression. On the other hand, in middle age, self-expression was high, regardless of self-expression content (in the order of “Uchi,” “Soto,” and “Yoso”). These results indicated differences in people’s self-expression in young adulthood and middle age.

**Key Words:** assertion, self-expression, field cognition, young adulthood, middle age

## I 問 題

平木 (1993) は、主張性 (アサーション) を「自分の気持ち、考え、信念などを正直に、率直に、その場にふさわしい方法で表現し、そして相手が同じように発言することを奨励しようとする」と定義している。主張性における自己表明のあり方には「アサーティブ」、「攻撃的」、「非主張的」の三つがあり、「アサーティブ」は自分も相手も大切にしたい自己表現 (平木, 1993)、「攻撃的」は、自分は大切にしたいが相手を大切にしない自己表現、「非主張的」は、自分は大切にしたいが相手を大切にしない自己表現である (沢崎, 2006)。しかし、沢崎ら (2002) はアサーティブになれば自分の欲求が通るというものではなく、お互いの意見や気持ちの相違によって生じた葛藤が起ることを覚悟したうえで、葛藤が起きてもそれを引き受けていこうとする気持ちが主張性における特徴であると述べている。つまり、アサーティブであるということは自分の欲求を相手に伝え、通そうとすることだけではなく、相手の欲求や意見を大切にしながら、時には自分の欲求を抑え、相手の欲求や意見を通すことも選択肢に入れたうえで、お互いが納得できる道を選択することで考えられる。

このように、主張性のあり方を考えるうえで、率直な自己表現のみに注目するのではなく、他者に配慮し、他者の表現を受け止める気持ちを持つという視点に着目することは重要であると考えられる。柴橋 (2001) は、他者の率直さへの期待を持つ者は、他者がはっきりと自分の気持ちや考えを言うことを排除、抑圧することなく、受けとめる気持ちがあると考え、他者の率直な考えや気持ちを聞きたいという思いは、相手の発言を促し、相手と同じように発言することを奨励しようとするという態度と密接にかかわっていると述べている。そこで、柴橋 (2001) は主張性を、率直な自己表現の「自己表明」と、他者が率直に自己表現することを望む気持ちの「他者の表明を望む気持ち」の二つの側面から捉えた。この「自己表明」と「他者の表明を望む気持ち」の二側面から主張性を捉えることによって、単なる率直な自己表現でなく、相手への配慮を含んでいるかどうかを考えることができる。

また、日本におけるアサーション像について伊藤 (2001) は、「自己表現やコミュニケーションにとどまらず、人としてのあり方や生き方をも含み、ありのままの自分を生きるためのものであるが、個よりも場が優位な日本では、場による縛りからの解放とともに場への熟慮

が不可欠である」と述べており、日本人の主張性を考えるうえで、場を考慮することは重要であると考えられる。

しかし、玉瀬ら（2003）によると、場を考慮した振る舞いは、現実の日常生活における身近な経験では、ごく当然のこととして扱われているためあまり意識されていない。それにも関わらず、人間関係においてその場にふさわしい振る舞い方を習得することは、日本人にとって容易ではなく、それゆえにこそ多くの対人関係における悩みや障害が発生しているのである（玉瀬ら、2003）。

ところで、社会言語学的立場に立つ三宅（1994）は、日本人の人間関係や言語行動を支配する社会・文化的特徴を考える枠組みとして、日本人の自己を取り巻く人間層を「ウチ・ソト・ヨソ」に分類することを提唱し、「ウチの人間は自己のまわりの家族やごく親しい人々、ソトの人間はごく親しくはないが自己やウチと関連のある人々、ヨソの人間は自己やウチとは関係がないが何かのきっかけで関係を持ち得る人々」と定義した。このような日本人の対人関係性に関する定義がある中で、玉瀬ら（2003）は、日本人の対人関係を非常に親密で遠慮のいらぬ人との関係である「ウチ」、学校や職場などの知人で、遠慮が必要な人との関係を「ソト」、自分とは全く関係がなく遠慮を必要としない人との関係を「ムエン」と定義し、日本人は相手との心理的距離に応じて行動を変える傾向にあると述べ、「対人関係において同じ状況におかれても、それにかかわる対象が異なることで行動を抑制したり（発揚したり）する場合に『場』を認知していると表現」すると定義した。そして玉瀬（2003）は、日本人は、ソト関係では自分と相手との心理的距離によって行動を変えていると考え、具体的な場面を設定したうえでソトの世界に特に注目して主張性について研究を行った。その結果、ほとんどすべての場面において、相手がタテ関係である場合の方がヨコ関係である場合よりもアサーション行動を抑制する傾向があること、青年用アサーション尺度において、個人差要因としての青年用アサーション尺度得点の高い人はその低い人よりも、タテ関係、ヨコ関係のいずれの相手に対しても相対的によりアサーティブに振舞う傾向があることが示された（玉瀬、2003）。

しかし、三宅（1993, 1994）が、日本人がウチ・ソト・ヨソのそれぞれの領域の人間に対して異なる対応をとることを示唆していることからわかるように、場の認知は、ソトの世界の中のみではなく、ウチ・ソト・ヨソの三つの場全体においても行っていると考えられる。このことをふまえると、ソトの世界に限らず、「場」を認知し、その場にふさわしく振る舞うことは重要であると考えられる。そのため、ウチ・ソト・ヨソのそれぞれの場における主張性を考えるという視点は、日本人の主張性

を考えるうえで重要であると考えられる。

また、アイデンティティの獲得と主張性の獲得は青年期において重要な課題のひとつと考えられている（柴橋、2001）。これに対し、成人期の中でも青年期の次の発達段階である中年期の課題は「生殖性」である（Erikson, 1950）。これは自分の子どもを産み育てることに加えて、職業における次世代の育成、新しい思想や作品、物を産み出すという育成的・創造的・生産的なかわりも含んでおり（森川、2009）、達成するためには後の世代とのかかわりが重要であると考えられる。さらに中年期では、心身両面での老化現象の兆しの出現とともに、職業や家庭においても様々な変化が起こる時期である（小田切、2009）。これらのことをふまえると、中年期において様々な変化が生じる中で、青年期に獲得した主張性や対人関係のあり方についても変化が生じると考えられる。青年期と中年期の対人関係性の違いについては、先に述べたような職業や家庭における変化が関係していると考えられる。職業では、昇進や転勤、定年退職、家庭では子供の成長、自立、両親の病氣、死などがあり、それに伴って夫婦の危機も生じてくる（小田切、2009）。そして今までウチであった家族が亡くなったり、ソトであった部下が転勤することによってヨソになったりと、青年期の対人関係から大きな変化が生じると予想される。このような対人関係の変化に伴い、ウチ・ソト・ヨソそれぞれに対する主張性のあり方も変化すると考えられる。これらのことをふまえると、成人期以降の主張性を考えるうえで、主張性を獲得する青年期のみならず、中年期にも焦点を当てることで、場の認知による主張性のあり方についての理解がより深まると考えられる。しかし、中年期の主張性のあり方について論じた研究はまだまだ少なく、対人関係性の視点を加えたものも見られない。

そこで、本研究では、ウチ・ソト・ヨソの概念を統一するために、ウチ・ソト・ヨソにあてはまる人々をそれぞれ「家族」、「家族以外の日常的にかかわりのある人々」、「日常的にかかわりのない人々」と定義する。そして、主張性の中でも特に自己表明のあり方に着目し、ウチ・ソト・ヨソという対人関係の視点をを用いて比較することにより、青年期および中年期の主張性のあり方を探索的に明らかにすることを目的とした。

## Ⅱ 方 法

### 1. 調査対象者と調査時期

2016年11月～2017年1月にA県内B大学の大学生55名、5年制の高等専門学校での4、5年生150名の、青年期205名、中年期95名の計300名を対象に、個別自記入形式の質問紙調査を実施した。青年期の対象者につ

いては、講義後の時間等を利用して一斉に配布、もしくは個別に配布し、回答を求め、後日回収を行った。中年期の対象者については、調査協力者である青年期の方の家族や知人などに依頼して配布し、回答を求めた。

回答依頼時には文書または口頭で説明し、合意を得た。なお、回答に欠損がみられた30名をデータから除外し、270名を分析の対象とした。回答者の年齢は、青年期については18～22歳（ $M=19.94$ ,  $SD=1.19$ ）、中年期については40～65歳（ $M=50.34$ ,  $SD=6.33$ ）であった。

## 2. 質問紙の内容

### 1) フェイスシート

青年期と中年期ともに性別、年齢について回答を求め、さらに中年期については職業の回答も求めた。

2) 柴橋（2001）等を参考に新たに作成した自己表明尺度  
柴橋（2001）、玉瀬ら（2001）、小野（2003）、蔭山（2009）を参考に新たに作成した自己表明尺度について、ウチ・ソト・ヨソにあてはまる人々をそれぞれ「家族」「家族以外の日常にかかわりのある人々」「日常にかかわりのない人々」と定義し、それぞれについて回答を求めた。

平木（2005）によると、アサーションには課題達成のためのアサーションと人間関係に関わるアサーションがある。課題達成のためのアサーションは、状況をしっかり分析し、問題を見定め、客観的に妥当な解決策を決めて実行するといったやり取りである。人間関係に関わるアサーションには、自分や他者の気持ちや考え、存在そのものを受け止め、応答し、協力、協働しようとする姿勢と言動である。しかし、柴橋（2001）の尺度の項目を検討すると、この人間関係に関わるアサーションの項目が少ないと考えられる。そこで、玉瀬ら（2001）、小野（2003）、蔭山（2009）の主張性に関する尺度を参考に、新たに4項目を作成した。この4項目を追加したことにより、新しく作成した自己表明尺度は計30項目となった。

さらに、「ウチ」を家族、「ソト」を日常にかかわりのある人々、「ヨソ」を日常にかかわりのない人々と定義し、ウチ・ソト・ヨソの概念がすべての調査協力者において統一されるように教示を行った。

教示の詳細については、まず、ウチ・ソト・ヨソの概念に関しては、“あなたが周りの人々に対してどのようにコミュニケーションをとっているかについておたずねしていきます。あなたのまわりの人々を分類するものとして「ウチ」「ソト」「ヨソ」の三つの概念があります。「ウチ」とは、家族のように、極めて自己に近い関係の人々のことです。「ソト」とは、友人や知人のように、極めて親しいというわけではないが、自己や「ウチ」と関連のある人々のことです。「ヨソ」とは、店員や電車

などで周りにいる人々のように、自己や「ウチ」とは関係がないが、何かのきっかけで関係を持ちうる人々のことです。ここでは、「ウチ」を家族、「ソト」を日常にかかわりのある人々、「ヨソ」を日常にかかわりのない人々と定義します。”とした。その後、ウチについての回答を求めため、“まず、「ウチ」の領域に当てはまる家族について、あなたがどのようにコミュニケーションをとっているか、おたずねします。右ページの質問について、質問文をよく読み、あてはまる数字に○をつけてください”と教示を行い、その下にウチの領域を示す図を載せることで、ウチに対するイメージアップを図った。そして、「1. 全くあてはまらない」「2. あまりあてはまらない」「3. だいたいあてはまる」「4. とてもあてはまる」の4件法で自己表明尺度について回答を求めた。さらに、ソト、ヨソについても同様に教示と図によるイメージアップを行ったあと、自己表明尺度についてそれぞれ回答を求めた。

### 3. 倫理的配慮

調査については筆者が所属する研究倫理委員会で承認を得た。そして、調査協力者に対しては書面にて研究の主旨とともに倫理的事項について説明を行った。書面による説明では、調査協力については自由意志であること、回答は中断しても構わないこと、データは匿名のものとして扱われ個人情報保護に努めること、データが調査の目的以外で使用されることはないことについて記載した。

### 4. 分析

分析にはSPSS Ver.22を使用した。

## Ⅲ 結 果

### 1. 自己表明尺度の因子分析

全30項目からなる、ソト条件における自己表明尺度について、いずれの項目についてもフロア効果および天井効果は示されなかった。そこで、全30項目について主因子法による因子分析を行った。因子数は固有値1以上の基準を設け、さらにその変化を考慮したうえで3因子構造が妥当であると判断し、プロマックス回転を行った。その結果、因子負荷量が.40以下、及び他因子に高い因子負荷量を示した「3. 相手にからかわれて不愉快になったときでも怒ったりしない」「12. 相手に怒りや不満を感じた時でもその気持ちを表さないようにする」「15. 相手に誘われたときは都合が悪くても断らない」「19. 一人ではできないようなことで困っているときは“手伝って”と相手に頼んでみる」の4項目を削除し、再度因子分析を行った。その結果、「8. 相手に頼まれたことがやっちはいけないことだと思っても引き受ける」の共通性が.16以下であったため、この項目を削除し、

再度因子分析を行った。その結果、3因子構造が得られた。結果はTable 1に示す。

第1因子は、相手への配慮や励まし、労りといった気持ちの表明や、相手への肯定的な感情の表明についての項目から構成されている。これは、相手に対する好意的な感情が含まれた意思の表明が行われているかどうかを測定する項目であると考えられる。そのため、第1因子を【好意的意思の表明】と命名した。次に、第2因子は、相手とは異なる自己の意思の表明や、相手の行動によって生じた負の気持ちの表明についての項目から構成されている。これは、自己の信念に基づき、自己の意思を優先して表明を行うかどうかを測定する項目であると考えられる。そのため、第2因子を【信念に基づく意思の表明】と命名した。最後に、第3因子は、相手に自分の感じている困難を伝えたり、相談したりする項目から構成されている。これは、相手に自分が困っていることを伝えるかどうかを測定する項目内容より【困難感の表

明】と命名した。そして、ソト条件におけるそれぞれの因子についてクロンバックの $\alpha$ 係数による信頼性分析を行った。その結果、【好意的意思の表明】因子は $\alpha=.89$ 、【信念に基づく意思の表明】因子は $\alpha=.88$ 、【困難感の表明】因子は $\alpha=.73$ であった。

このソト条件における因子構造がウチ条件、ヨソ条件における自己表明尺度においてもあてはまると仮定し、同様にクロンバックの $\alpha$ 係数による信頼性分析を行った。その結果、ウチの【好意的意思の表明】因子は $\alpha=.87$ 、【信念に基づく意思の表明】因子は $\alpha=.86$ 、【困難感の表明】因子は $\alpha=.70$ 、ヨソの【好意的意思の表明】因子は $\alpha=.89$ 、【信念に基づく意思の表明】因子は $\alpha=.83$ 、【困難感の表明】因子は $\alpha=.67$ であった。この結果から、ウチ、ソト、ヨソのすべての自己表明尺度の結果に、ソトにおける自己表明尺度の因子構造が当てはまるものであるとした。

Table 1  
自己表明尺度の因子分析結果 (N=270, R<sup>2</sup>=.44)

| 第1因子    | 好意的意思の表明 (ウチ $\alpha=.87$ , ソト $\alpha=.89$ , ヨソ $\alpha=.89$ )    | 第1因子  | 第2因子 | 第3因子 | 共通性  |
|---------|--|-------|------|------|------|
| 1 (28)  | 相手の努力や労苦に対して大変だと思ったときはその気持ちを伝える                                    | .87   | -.02 | -.02 | .44  |
| 2 (29)  | 相手を励ましたいと思ったときは励ましの言葉をかける  | .81   | .02  | .00  | .66  |
| 3 (26)  | 相手を慰めたいと思ったときは率直に慰めの言葉をかける   | .78   | -.08 | .10  | .63  |
| 4 (27)  | 相手の意見に賛成だと思ったときはそのことを伝える   | .77   | .01  | .04  | .73  |
| 5 (1)   | 相手のしたことがいいなと思ったときはその気持ちを言葉で表す                                      | .64   | .10  | -.04 | .66  |
| 6 (30)  | 相手に好意を持った場合、素直に好意を示す   | .59   | -.06 | .16  | .43  |
| 7 (25)  | 相手にほめられて嬉しいときはその気持ちを素直に表す  | .54   | -.07 | .24  | .42  |
| 8 (10)  | 相手に感謝しているときでも言葉にして表すことはない (R)                                      | .53   | .02  | -.23 | .24  |
| 9 (5)   | 面白いことや感動したことがあったとき相手にその気持ちを伝える                                     | .53   | .01  | .24  | .45  |
| 10 (7)  | 相手に強く言いすぎて悪かったと思ったときはその気持ちを伝える                                     | .50   | -.05 | -.08 | .22  |
| 第2因子    | 信念に基づく意思の表明 (ウチ $\alpha=.86$ , ソト $\alpha=.88$ , ヨソ $\alpha=.83$ ) |       |      |      |      |
| 11 (13) | 相手の考えに賛成できないとき「私はそうは思わない」とはっきり言う                                   | .16   | .76  | -.11 | .50  |
| 12 (20) | 相手の行動が自分にとって迷惑だと思うときはその相手に「やめて」と言う                                 | .07   | .69  | -.04 | .36  |
| 13 (4)  | 分担した仕事をしようとしないう相手にははっきり注意する  | -.07  | .69  | .09  | .60  |
| 14 (11) | 相手にどう言われようと正しいと思うことは自分の信念を貫く                                       | .01   | .62  | -.24 | .39  |
| 15 (17) | 貸したものをいつまでも返してくれない相手には「返して」とはっきり言う                                 | .12   | .62  | -.13 | .48  |
| 16 (22) | 周りに迷惑な行動をしている相手にははっきり注意する  | .03   | .60  | -.06 | .36  |
| 17 (6)  | 相手のしていることに不満を感じた時はその気持ちを相手に言う                                      | -.08  | .58  | .16  | .34  |
| 18 (24) | 相手の無神経な言い方で傷ついたときは自分の気持ちをはっきり言う                                    | -.16  | .56  | .31  | .39  |
| 19 (18) | 相手と違う考えを持っていても言わずに相手に合わせる (R)                                      | -.07  | .55  | .01  | .30  |
| 20 (23) | 相手に自分のものを貸してと頼まれても貸したくないと思えば断る                                     | -.13  | .54  | .10  | .69  |
| 21 (2)  | 相手と考え方が違っていたときでも話し合ったり議論しようとする                                     | -.03  | .49  | .21  | .47  |
| 22 (21) | 相手から頼まれたことはやりたくないことでも断らない (R)                                      | -.09  | .47  | .07  | .30  |
| 23 (9)  | 相手に意見を求められたときは自分の考えをはっきり言う   | .28   | .43  | -.04 | .23  |
| 第3因子    | 困難感の表明 (ウチ $\alpha=.70$ , ソト $\alpha=.73$ , ヨソ $\alpha=.67$ )      |       |      |      |      |
| 24 (14) | つらいときややるしいときはその気持ちを相手に伝える  | .04   | .09  | .78  | .31  |
| 25 (16) | どうしていいかわからないことがあって困ったときは相手に相談する                                    | .21   | -.02 | .58  | .46  |
|         |  | 因子間相関 | 第1因子 | .200 | .424 |
|         |  |       | 第2因子 |      | .285 |

注1：括弧内の数字は質問紙で提示された順番を示す

注2：(R) は反転項目

## 2. 「場」の条件と発達段階条件による自己表明得点についての2要因分散分析

場の認知の違い3群と発達段階の違い2群を独立変数、自己表明得点の各因子得点3つそれぞれの平均点を従属変数とする2要因分散分析を行った。その結果、自己表明尺度の各因子において交互作用が示された。結果を表2に示す。

### 1) 自己表明尺度【好意的意思の表明】因子における交互作用と単純主効果

【好意的意思の表明】因子において分散分析を行ったところ、球面性の仮説が成り立っていなかったため、Greenhouse-Geisserの自由度の修正を行った。その結果、交互作用が示された ( $F(1.77, 470.91) = 9.73, p < .001$ )。そこで、「場」の単純主効果の検定を行ったところ、ソト条件において、中年期より青年期のほうが、自己表明得点が高い高かった ( $F(1,266) = 11.39, p < .01$ )。しかし、ウチ条件とヨソ条件においては、有意差は示されなかった (ウチ:  $F(1,266) = .39, n.s.$ , ヨソ:  $F(1,266) = 3.30, n.s.$ )。また、発達段階の単純主効果の検定を行ったところ、青年期条件、中年期条件ともに有意差が示された (青年期:  $F(2,265) = 170.84, p < .001$ , 中年期:  $F(2,265) = 45.70, p < .001$ )。そこで、Bonferroni法による多重比較を行ったところ、青年期条件において、ソト>ウチ>ヨソの順で自己表明得点が高い高かった (ウチとソト:  $p < .05$ , ウチとヨソ:  $p < .001$ , ソトとヨソ:  $p < .001$ )。また、中年期条件において、ウチ>ソト>ヨソの順で自己表明得点が高い高かった (ウチとソト:  $p < .05$ , ウチとヨソ:  $p < .001$ , ソトとヨソ:  $p < .001$ )。

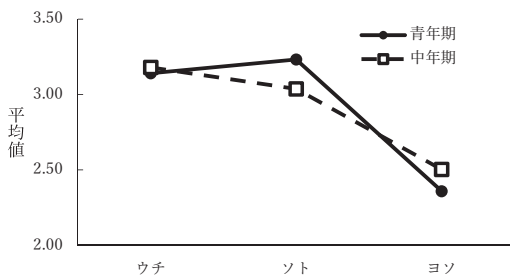


Fig.1 好意的意思の表明因子の分散分析の結果

### 2) 自己表明尺度【信念に基づく意思の表明】因子における交互作用と単純主効果

【信念に基づく意思の表明】において分散分析を行ったところ、球面性の仮説が成り立っていなかったため、Greenhouse-Geisserの自由度の修正を行った。その結果、交互作用が示された ( $F(1.83, 487.39) = 22.11, p < .001$ )。そこで、「場」の単純主効果の検定を行ったところ、ウ

チ条件において、中年期より青年期のほうが、自己表明得点が高い高かった ( $F(1,266) = 11.90, p < .01$ )、ヨソ条件において、青年期より中年期のほうが、自己表明得点が高い高かった ( $F(1,266) = 14.46, p < .001$ )。また、ソト条件においては、有意差は示されなかった ( $F(1,266) = 3.09, n.s.$ )。さらに、発達段階の単純主効果の検定を行ったところ、青年期条件、中年期条件ともに有意差が示された (青年期:  $F(2,265) = 283.23, p < .001$ , 中年期:  $F(2,265) = 45.43, p < .001$ )。そこで、Bonferroni法による多重比較を行ったところ、青年期条件においてウチ>ソト>ヨソの順で自己表明得点が高い高かった ( $p < .001$ )。また、中年期条件においても同様に、ウチ>ソト>ヨソの順で自己表明得点が高い高かった ( $p < .001$ )。

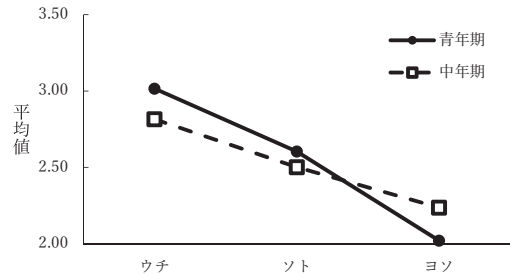


Fig.2 信念に基づく意思の表明因子の分散分析の結果

### 3) 自己表明尺度【困難感の表明】因子における交互作用と単純主効果

【困難感の表明】因子において分散分析を行ったところ、交互作用が示された ( $F(2,532) = 15.73, p < .001$ )。そこで、「場」の単純主効果の検定を行ったところ、ソト条件において、中年期より青年期のほうが、自己表明得点が高い高かった ( $F(1,266) = 17.70, p < .001$ )、ヨソ条件において、青年期より中年期のほうが、自己表明得点が高い高かった ( $F(1,266) = 6.65, p < .05$ )。ウチ条件においては、有意差は示されなかった ( $F(1,266) = 2.70, n.s.$ )。また、発達段階の単純主効果の検定を行ったところ、青年期条件、中年期条件ともに有意差が示された (青年期:  $F(2,265) = 202.90, p < .001$ , 中年期:  $F(2,265) = 37.98, p < .001$ )。そこで、Bonferroni法による多重比較を行ったところ、青年期条件においてヨソの自己表明得点が高い最も有意に低かったものの、ウチとソトに有意差は示されなかった (ウチとソト:  $n.s.$ , ウチとヨソ:  $p < .001$ , ソトとヨソ:  $p < .001$ )。また、中年期条件においては、ウチ>ソト>ヨソの順で自己表明得点が高い高かった (ウチとソト:  $p < .01$ , ウチとヨソ:  $p < .001$ , ソトとヨソ:  $p < .001$ )。

Table 2  
「場」の条件と発達段階条件による自己表明得点についての2要因分散分析

|             |      | ウチ   |      | ソト   |      | ヨソ   |      | 主効果        |            | 交互作用     |
|-------------|------|------|------|------|------|------|------|------------|------------|----------|
|             |      | 青年期  | 中年期  | 青年期  | 中年期  | 青年期  | 中年期  | 場の認知<br>F値 | 発達段階<br>F値 | F値       |
| 好意的意思の表明    | Mean | 3.14 | 3.18 | 3.23 | 3.04 | 2.36 | 2.50 | 221.61***  | 0.01       | 9.73***  |
|             | SD   | 0.50 | 0.44 | 0.48 | 0.40 | 0.62 | 0.56 |            |            |          |
| 信念に基づく意思の表明 | Mean | 3.02 | 2.82 | 2.60 | 2.50 | 2.02 | 2.50 | 289.10***  | 0.44       | 22.11*** |
|             | SD   | 0.48 | 0.41 | 0.47 | 0.43 | 0.44 | 0.44 |            |            |          |
| 困難感の表明      | Mean | 2.84 | 2.69 | 2.77 | 2.41 | 1.66 | 1.89 | 196.30***  | 2.12       | 15.73*** |
|             | SD   | 0.80 | 0.56 | 0.74 | 0.49 | 0.69 | 0.65 |            |            |          |

注1: \*\*\*=p<.001

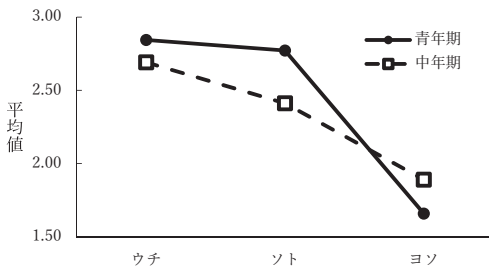


Fig.3 困難感の表明因子の分散分析の結果

#### IV 考 察

##### 1. 自己表明尺度の因子分析

尺度を作成するにあたって、主に参考にした柴橋(2001)の自己表明尺度は、第1因子【限界・喜びの表明】、第2因子【意見の表明】、第3因子【不満・要求の表明】、第4因子【断りの表明】の4因子構造であった。しかし、作成した自己表明尺度は【好意的意思の表明】因子、【信念に基づく意思の表明】因子、【困難感の表明】因子の3因子構造となった。

本研究において作成した自己表明尺度と柴橋(2001)の自己表明尺度とを比較すると、第1因子の【好意的意思の表明】因子には、柴橋(2001)の【限界・喜びの表明】因子の一部の項目に加え、今回新たに付け加えた、人間関係に関わるアサーションの項目が含まれていた。この【好意的意思の表明】因子の項目を検討すると、相手のことを考え、相手に対する好意的な意思を表明する内容であると考えられる。これは平木(2005)の定義する、自分や他者の気持ちや考え、存在そのものを受け止め、応答し、協力、協働しようとする姿勢と言動である、人間関係に関わるアサーションに関連するものであると考えられる。

また、第2因子の【信念に基づく意思の表明】因子には、柴橋(2001)の【意見の表明】因子、【不満・要求の表明】因子、【断りの表明】因子の項目が含まれてい

た。この【信念に基づく意思の表明】因子の項目を検討すると、相手と違う自己の意思の表明や、相手の行動によって生じた負の気持ちの表明であり、自己の信念に基づき、自己の意思を優先して表明を行うものであると考えられる。これは平木(2005)の定義する、状況をしっかり分析し、問題を見定め、客観的に妥当な解決策を決めて実行するといったやり取りである、課題達成のためのアサーションと関連するものであると考えられる。

さらに、第3因子の【困難感の表明】因子には、柴橋(2001)の【限界・喜びの表明】因子の一部の項目が含まれていた。この【困難感の表明】因子の項目を検討すると、人間関係に関わるアサーションに関わるものであると考えられる。相手に助けを求めることで相手への信頼感、つまり好意的意思を表明することにつながると考えられる。しかし、同時に相手に助けを求めることで迷惑をかけてしまう場合も考えられるため、相手への好意的意思を表明する【好意的意思の表明】因子とは異なる因子として分かれたと考えられる。

##### 2. 「場」の条件と発達段階条件による自己表明得点についての2要因分散分析

###### 1) 「場」の条件と発達段階条件による【好意的意思の表明】因子の差異について

【好意的意思の表明】因子について、青年期においてはソト>ウチ>ヨソの順に、中年期においては、ウチ>ソト>ヨソの順に自己表明得点が高いことが示された。青年期においては、ソトに対して最も好意的意思を表明するという結果となった。これは、青年期では、ウチの人々に対して好意的意思を表明する際に、照れや恥ずかしさが生じるとともに、ソトの人々に対しては、良い対人関係を維持していくために、積極的に好意的意思を表明するからではないかと考えられる。

また、青年期と中年期の自己表明得点を比較すると、ソト条件において中年期よりも青年期のほうが自己表明得点が高いことが示された。このことから、ソトの人々に対して中年期よりも青年期のほうがより好意的な意思を表明すると思われる。中年期においては、職場での関係からソトに上司や部下といったタテ関係(自分より

目上)の人物が含まれると考えられる。それは、青年期における学校内の仲の良い先輩といったようなタテ関係でありながらもヨコ関係(自分と対等)に近い人物とは異なり、対応を間違えれば自分の信頼や社会的な地位を失ってしまうような、はっきりとしたタテ関係の対人関係であると考えられる。そのため、青年期のように気軽に【好意的意思の表明】をしづらくなり、結果として中年期よりも青年期のほうが好意的な意思を表明するのではないかと推測される。

## 2) 「場」の条件と発達段階条件による【信念に基づく意思の表明】因子の差異について

【信念に基づく意思の表明】因子について、青年期、中年期ともにウチ>ソト>ヨソの順に自己表明得点が高いことが示された。このように、青年期と中年期という発達段階の違いに関わらず、ウチ>ソト>ヨソの順に【信念に基づく意思の表明】をすることが多いということは、【信念に基づく意思の表明】は、心理的距離の近い人に対して行われるもの、行いたいものではないかと考えられる。【信念に基づく意思の表明】は、相手と違う自己の意思の表明や、相手の行動によって生じた負の気持ちの表明であり、自己の信念に基づき自己の意思を優先して表明を行うものである。そのため、【信念に基づく意思の表明】を行うことによって、相手に自分の気持ちや意見、考えを理解してほしいという気持ちがあるのではないかと考えられる。そして、発達段階の違いに関わらず心理的距離が近いほど【信念に基づく意思の表明】を行っているということから、自分のことを理解してほしいという気持ちは心理的距離が近いほど強くなるのではないかと考えられる。

また、青年期と中年期の自己表明得点を比較すると、ウチ条件において中年期よりも青年期のほうが自己表明得点が高く、ヨソ条件において青年期よりも中年期のほうが自己表明得点が高いことが示された。このことから、ウチの人々に対しては中年期よりも青年期のほうがより信念に基づく意思の表明をするが、ヨソの人々に対しては青年期よりも中年期のほうがより信念に基づいた意思を表明すると考えられる。信念に基づく意思の表明は、相手よりもまず自己の意思を大切に表明するため、好意的意思の表明や困難感の表明に比べて相手との衝突が生じやすいのではないかと考えられる。先に述べたように、中年期では様々な変化とともに夫婦の危機も生じてくる(小田切, 2009)ため、これをできるだけ避けるために、青年期の時よりも相手との衝突が生じやすい自己の信念に基づいた意思の表明をウチの人々に対して行わなくなったのではないかと考えられる。

また、中年期は、青年期よりもヨソの人々と関わってきた経験が多いと考えられる。そのため、ヨソの人々に対して【信念に基づく意思の表明】を行わなければなら

ない場面にも多く接しており、結果として青年期に比べて中年期のほうがヨソの人々に対して【信念に基づく意思の表明】ができるようになっていないかと推測される。

## 3) 「場」の条件と発達段階条件による【困難感の表明】因子の差異について

【困難感の表明】因子について、青年期においてはヨソ条件が最も自己表明得点が低く、ウチ条件とソト条件に差はないが、中年期においてはウチ>ソト>ヨソの順に自己表明得点が高いことが示された。このことから、青年期においてはウチとソトの人々に対する困難感の表明は同じくらい行うと考えられる。また、青年期と中年期の自己表明得点を比較すると、ソト条件とヨソ条件において中年期よりも青年期のほうが、自己表明得点が高いことが示された。このことから、ソトとヨソの人々に対して中年期よりも青年期のほうがより困難感を表明すること、つまり、中年期になると、ソトやヨソの人々に対して困難感を表明することが難しくなると考えられる。

困難感の表明は、自分の辛さや苦しさを相手に伝えたり相談したりするため、自分の弱い部分をさらけ出すことにつながるものであると考えられる。中年期においては、職業では昇進や転勤、定年退職、家庭では子供の成長、自立、両親の病気、死などがあり、それに伴って夫婦の危機も生じてくる(小田切, 2009)。例えば、昇進すれば部下が増え、頼られる存在、つまり相談される存在になると考えられる。また、家庭では子どもが成長し、自立すれば頼られることは少なくなり、むしろ子どもに頼る場面も出てくる一方、両親からは頼られることが増えてくると考えられる。そのため、ウチの人々に対しては頼り頼られる存在であるため、結果として青年期のときと同じように困難感を表明することができると考えられる。しかし、ソトの人々に対しては頼られるべき存在であろうとし、結果として自分の弱い部分をさらけ出す、つまり、困難感を表明することが青年期よりも難しくなるのではないかと考えられる。また、ヨソにおいても中年期はソトと同様に社会的役割を担っているため、ヨソの人々に対しても青年期と比べて困難感を表明することが難しいのではないかと考えられる。

しかし、頼られることの多い存在である中年期において、困難感を表明し、他人を頼ろうとすることは自らの負担を減らすうえで重要なことであると考えられる。そのため、中年期については、ウチはもちろん、ソトやヨソの人々に対しても青年期のときと同じように困難感を表明できることが重要であると考えられる。

## 3. 本研究の課題と今後の展望

本研究では、質問紙を用いてウチ・ソト・ヨソの3つの場を想定するよう求め、青年期と中年期に当たる対象者の日常的な自己表明のあり方について調査を行った。



しかし、ウチ・ソト・ヨソの場の概念を定義して調査したため、実際の被験者の想定する場とは異なる可能性がある。そのため、今後は実際の場を考慮した定義を考えるとともに、他者の表明を望む気持ちも合わせて調査を進めることにより、青年期以降の場の認知と主張性の関連をより詳細に明らかにすることが期待できる。

さらに、本研究の結果においては、ウチとソトの間に有意差が出ない部分があり、その境界をはっきりと線引きができない部分もあった。三宅 (1994) のウチ・ソト・ヨソモデルにおいては、日本人のウチとソト、ソトとヨソの境界をはっきりと線が引かれているが、ウチとソトの境界に関しては状況によって収縮すること、ソトとヨソの境界に関しては、相手と自分に関連ができると境界が収縮してヨソの人間がソトへ繰り込まれることが想定されている。このように、ウチ・ソト・ヨソモデルには境界が状況によって変化する複雑性がある。本研究では、尺度を用いて同一の構成概念で比較検討を行ったが、三宅 (1994) の指摘を踏まえると、場の認知によって自己表明のあり方に質的な違いがある可能性も考えられる。そこで、今後の展望として、具体的に状況設定を行うなどしてウチ・ソト・ヨソの境界を明確にしたうえで調査を行う必要性が考えられる。

先に述べたように、平木 (1993) の主張性の定義における「その場にふさわしい方法で」という部分は、玉瀬ら (2003) によると、現実の日常生活における身近な経験ではごく当然のこととして扱われているため、あまり意識されていない。本研究では、その「ごく当然のこと」として扱われている場の認知の違いによる主張性のあり方を、自己表明という側面に着目し、発達段階の違いという視点を加えて検討した。このように、場の認知に応じて変化する主張性に焦点を当てることにより、日本人にとって容易ではない、人間関係においてその場にふさわしい振る舞い方を習得すること (玉瀬ら, 2003) を少しでも容易にし、対人関係における悩みや障害を減らすことにつながるのではないかと考えられる。本研究がそのような日本人の対人関係における悩みや障害を減らすことにつながる基礎となることを期待する。

## 引用文献

- Erikson, E. H. (1950). *Childhood and society*. New York: W. Norton & Company; 仁科弥生訳. 1977. 幼少期と社会1. 東京: みすず書房
- 平木典子 (1993). アサーション・トレーニング: さわやかな自己表現のために. 東京: 金子書房.
- 平木典子 (2005). 職場のメンタルヘルス向上のためのアサーション・トレーニング. 平木典子 (編). 現代のエスプリ 450 アサーション・トレーニング—その現代的意味. 至文堂, pp.81-88.
- 伊藤弥生 (2001). 日本におけるアサーション像の探索的研究—アサーション・トレーニング参加者の個別面接を土台に—. 心理臨床学研究, **19**, 401-420.
- 森川美子 (2009). 中年期の心理と課題. 永井撤 (監). 田中信市・下川昭夫 (編). ライフサイクルの臨床心理学シリーズ3 中年期・老年期の臨床心理学. 培風館, pp.1-28.
- 三宅和子 (1993). 感謝の意味で使われる詫び表現の選択メカニズム—Coulmas (1981) の indebtedness 「借り」の概念からの社会言語学的展開—. 筑波大学留学生センター日本語教育論集, **8**, 19-38.
- 三宅和子 (1994). 日本人の言語パターン—ウチ・ソト・ヨソ意識—. 筑波大学留学生教育センター日本語教育論集, **9**, 29-39.
- 用松敏子・坂中正義 (2004). 日本におけるアサーション研究における展望. 福岡教育大学紀要第4分冊教職科編, **53**, 219-226.
- 小田切紀子 (2009). 社会人・家庭人としての課題と病理. 永井撤 (監). 田中信市・下川昭夫 (編). ライフサイクルの臨床心理学シリーズ3 中年期・老年期の臨床心理学. 培風館, pp.51-71.
- 小野久美子・嶋田洋徳・平木典子 (2003). 大学生用アサーション尺度作成の試み. 日本行動療法学会大会発表論文集, **29**, 106-107.
- 岡本祐子 (1985). 中年期の自我同一性に関する研究. 教育心理学研究, **33**, 295-306.
- 沢崎達夫・平木典子 (2002). アサーションの基礎知識. 園田雅代・中釜洋子・沢崎俊之 (編). 教師のためのアサーション. 金子書房, pp.29-68.
- 沢崎達夫 (2006). 青年期女子におけるアサーションと攻撃性および自己受容との関係. 目白大学心理学研究, **2**, 1-12.
- 柴橋祐子 (2001). 青年期の友人関係における自己表明と他者の表明を望む気持ち. 発達心理学研究, **12** (2), 123-124.
- 園田雅代 (2002). 2章教師のためのアサーション. 園田雅代・中釜洋子・沢崎俊之編 教師のためのアサーション. 金子書房, pp.29-68.
- 玉瀬耕治・越智敏洋・才能千景・石川昌代 (2001). 青年用アサーション尺度の作成と信頼性および妥当性の検討. 奈良教育大学紀要, **50**, 1, 221-232.
- 玉瀬耕治・馬場弘美 (2003). アサーションに及ぼす場の認知の影響に関する研究. 教育実践総合センター研究紀要, **12**, 43-50.